

序章

【2回目の自己点検・評価にあたって】

共愛学園前橋国際大学は 1999 年度から 2004 年度まで 6 年間の自己点検・評価報告に基づき、2005 年度財団法人大学基準協会に加盟判定審査ならびに認証評価を申請した。

1 年間の審査期間を経て 2006 年 4 月 1 日付けで大学基準協会正会員への加盟・登録（認定期間は 2010 年 3 月 31 日まで）ならびに認証評価が承認された。

その際、各点検項目において、長所として特筆すべき点や改善を要する点について、さまざまな指摘を受けた。個々の内容については、本報告書の中で順次述べて行くこととするが、われわれが、前回の自己点検・評価の結果として最も重要なことと受け止めたのは、『勧告』を受けた、以下の 2 点である。

(1) 学生の受け入れに関すること

- 1) 開学以来、学生数が収容定員を満たしていなかった（2005 年度時点で充足率が 0.92 であった）こと
- 2) 退学者数が増加傾向にあったこと

(2) 教員組織に関すること

- 1) 2003 年度および 2004 年度に、大学設置基準上の必要専任教員を充たしていなかったこと

これらの課題については従前より改善策を講じていたが、この勧告を受けたことで、本学の自己点検評価委員会は改めて改善への工程を確認し、勧告のあった 2006 年 7 月以降毎年度「改善報告書」を提出しつつ、状況の改善に努めた。

その結果、学生の定員充足率は 2006 年度 107.9%、2007 年度 107.1%、2008 年度 108.3% と、定員を満たした。退学者の割合については、2006 年度に減少したものの、その後 4% 台を超えており、引き続き努力が必要と考えている。現状分析の詳細と今後の更なる改善に向けての方策は、本編第 4 章で詳しく述べる。

必要専任教員数については、2005 年度時点で充足しており、その後も基準を満たすと同時に、より高い水準で教育目標を達成するための教員採用と FD に取り組んできていることを本編第 8 章で報告する。

また、開学以来、地域社会の国際化に貢献できる人材を育てるといふ本学の教育目標を達成するために、専攻、コース制の導入やカリキュラムの改定など、さまざまな組織改革・教育課程改革を行ってきたが、2005 年度の段階では、その取り組みを「流動的」と捉えられ、「改善・改革していくあり方には、危うさを感じる」という指摘を受けた。この指摘事項は『勧告』という形ではなかったが、内容的に、本学の教育の根幹にあたる部分でもあり、以後 3 年間、自己点検の中核となる課題として継続的に取り組みを積み重ねてきた。その結果、現在では 2 つの専攻と 4 つのコースが定着し、延べ 1000 名を超える卒業生を社会に送り出したことで、教育組織の安定化とともに、本学の教育の成果がいよいよ具体的な成果として見え始めている。そのことについては、今回、初めて卒業生に対するアンケート調査を行うことで、本学の教育の妥当性の検証を試みた。その結果は第 3 章、第 5 章で報告する。

また前回の自己点検・評価では、2 専攻 4 コースがそれぞれの独自性を追及していったことにより、学部共通科目が減少し、「世界・地域の国際化の中を生きる人間を育てるといふ教育目的に沿って開設した科目の姿が見えにくくなっており、大学のアイデンティティが掴みにくくなっている」との指摘もあった。これについても、各専攻、各コースの教育目標を明確にしつつ、単一学部の大学としてのアイデンティティを明確にできるようなカリキュラム改革に取り組み、2009 年度から取り入れる予定の新しいカリキュラム体系を構築することができた（第 3 章参照）。

以上のように、前回の自己点検・評価以降、本学は、専任教員数の基準を満たしつつ、学生の定員充足率を改善し、専攻・コースを充実させて安定した教育組織・教育課程を構築してきた。また、同時に国際社会学部としてのアイデンティティを醸成できるようなカリキュラム体系をつくることを改革の柱として自己点検・評価を進めてきた。本報告書は、その概要をまとめたものである。

報告書作成に当たり、本学への進学実績のある高等学校 18 校への訪問調査、および開学以来の卒業生を対象としたアンケート調査を実施し、外部シンクタンクによる分析も行った。このことにより、より客観的な視点を加えた自己点検・評価をすることができたことを付加しておく。

【沿革】

本学の母体である共愛学園は、群馬県内でもっとも歴史ある私学として、当時先進の知識人であったクリスチャンの有志と地元の教会、新島襄、アメリカンボード宣教師らの協力・支援を得て、1888年に前橋英和女学校として創立され、上毛の地域における女子教育の発展に貢献してきた。翌年の1889年には、経営母体としての「共愛社」が創設され、校名を上毛共愛女学校と改称している。2008年は共愛学園創立120周年にあたり、10月18日に学園主催による記念式典が共愛学園中学校・高等学校の大礼拝堂で挙行され、多くの関係者に120周年を共に祝っていただいた。

「共愛」という校名の由来は、創設期の文書に残ってはいないが、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」(ヨハネによる福音書15章12節)という聖書の言葉に基づくと理解されている。

「共愛社」の名称に関して「共愛学園百年史」では、「愛」はキリストの説く神の愛(アガペー)を意味し、「共愛社」とは「キリストの愛を信じるものたちの集まり(結社)」であるとその名称の成り立ちを推測している。なお、「共愛社」の「社」は当時の結社に一般的なもので、教育関係の例としては京都の同志社(1875年設立)がある。ちなみに、同志社を設立した新島襄は群馬県出身であり、共愛社設立の発起人の一人にもなっている。

「共愛」すなわち「共に愛し合うこと」は、「共生」すなわち「共に生きること」を意味し、今日的な最重要課題であるばかりでなく、現在、未来を担う人々に向けられたたいへん重要なメッセージであるといえる。

戦後、学園は共愛学園幼稚園、共愛学園中学校・高等学校として発展し、創立百年にあたる1988年に共愛学園女子短期大学国際教養科を設置、さらに1999年、改組再編により男女共学の共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科を発足させた。

現在、学園は共愛学園幼稚園、共愛学園中学校、共愛学園高等学校、共愛学園前橋国際大学からなる総合学園へと発展した。総合学園としての連携を強める目的でキャンパスの一元化も進んでおり、1998年、大学隣接地である駒形キャンパスへ中学・高校を移転、同じく2006年には幼稚園を移転、2010年には駒形キャンパスに隣接している既存の前橋市営保育園が本学園に経営移管され、共愛学園木瀬保育園としてスタートすることになった。

「共愛学園」の学校法人名は2004年から導入しているが、少しずつ地域に浸透しはじめ、地域に貢献する教育機関として、その務めを果たすべく努力している。